
夢解 2

烏

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

夢解 2

【Nコード】

N3506B

【作者名】

烏

【あらすじ】

半年も活動していなかった夢職、芥川清一のもとに久々の依頼が！しかし長年のパートナー松風群青は、それを快くは思っていないかった。夢職、氷壁淑に代わり、今度活躍するのは見た目は大人、頭脳は子どものお坊ちやま。

夢職 芥川清一

久々に依頼が来ました。しかし、私わたくしとしては主には見せない方がよろしい、そう思ったのです。勝手かと思いましたが、私は今コレを破棄しようとして、ゴミ箱の前に来たわけでございます。

「群青おお！」

しかしどういうわけか、いつも昼過ぎまで寝ていらっしやる主が、何故かこの日は目覚めよく私の背中に飛びついてきたのです。

悪いことはできないものですね、主は猫のように大きな瞳を光らせ、私が握りしめた依頼書を見つけました。

「何だ、依頼来たんじゃない！」

「いえ、コレは・・・」言葉が詰まる私をよそに、主は素早く依頼書を取り上げ、声を上げました。

「うおお！何だこの依頼！」

主が声を上げるのも無理はありません。けれども私は、不安に駆られています。

木造の平屋に、夢解の事務所を構えているのは、芥川誠一あきたがわせいいちという名の若者だ。芥川財閥の御曹司。見た目は若者かもしれないが、中身はお湯も沸かせないお子様である。もし彼に、夢職としての才能がなかったら、能無し人間になっていたに違いない。

そして、そんな芥川に付き添っているのが、幼なじみでパートナーまっかせぐんじょうの松風群青。頭脳明晰の美男子、能無し芥川が生きていけるのは百パーセント彼のお陰である。

出来の悪い芥川と、秀才の群青。正反対の二人が夢解の事務所を開いて五年が経つ。

「ちよっとちよっと！凄くない、群青！地元警察からの依頼だよお

?! 僕も捨てたもんじゃないって!」

芥川が、子どものようにソファの上で飛び跳ねる。
訂正しよう、子どものようにはなく、子ども。

「お喜びのところ申し訳ないのですが、お受けになるのですか？」
群青が、心配そうな目を向ける。

「え、ダメなの？」

半年以上依頼のないオンボロ事務所に、やっと舞い込んだ依頼。
しかし群青は、それを快く思っていないようだ。

「駄目というわけでは・・・ただ、主はもう半年も夢職として働いていない身です。勘が鈍っているのでは？」

「そんなことあるかい！大体、世の中夢で苦しんでいるピープルが沢山いるつてのに、家の都合で満足に宣伝活動もできなかつたんだよ?!」

芥川財閥の御曹司である身、夢職として働くのを今でも反対され続けているのだ。

「家飛び出して、やあっと自由の身になったんだ！何で活動しなきゃいけないわけ?!」

「いえ・・・いけないわけでは・・・」群青が言葉を濁す。

「あんなヒヨッコ淑だって、今やベテラン夢職とか言われて人気なんだよ?! 僕だって」

「淑さまは、元々才能がおありに・・・」

そう言いかけて止めた。

芥川が目つきが、明らかに変わったからだ。

「では群青、僕には才能がないと？」

「誤解を生むような発言、謝ります」

深く頭を下げながら、群青はこの気まずくなった空気をどう変えようか考えていた。

答えは簡単。

認めればいいんだ・・・

「群青、僕はキミに謝ってほしいんじゃないんだけど・・・」

「分かっています主。この依頼、お受けいたしましょう」
苦笑いする群青を見て、芥川はまた、子どものようにソファアの
上で飛び跳ねだした。

これまた失礼。訂正しよう、子どものようにではなく、子どもだ。

親バカ

警察署と聞いて、大きな建物だと信じて疑わなかった芥川は着いた瞬間、帰りたくなっていた。

これは警察署ではなく、駐在所である。

「ねえね、群青・群青は知ってた？」

「はい。と言いますか、私にとって警察署とは、小さい頃からここですよ」

群青が本当に秀才なのか、疑った。

「まあいいや。警察には変わりないし」

やや不満を残しながらも、芥川は駐在所に入って行った。

「すみません、夢職の芥川と申しますが・・・」

「あ！夢解の方ですか！？いやいや、わざわざ来てもらって光栄です！」

出てきたのは、申し訳ないが警察と呼ぶには程遠い、中年太りの男だ。

「こんな体格じゃ、痴漢一人まともに逮捕できないだろう。」

「どうぞ、どうぞ！」

真鍋まなべという名のお巡りが、二人にお茶を出す。ただそれだけなのに、彼の額はすでに汗が密集している。

「いやいや、夢解というところは噂に聞いていたんですが、本当にあるんですね！感激感激！」

何故、二度繰り返す？

「あの、早速ですが依頼内容を詳しく聞かせてもらえますか？」

「はいはい！あのですね、実は息子のことなんですよ」

息子？！

随分、規模の小さい依頼に、芥川の顔が引きつった。

「うちの息子、敦あつしって言うんですけどね、これが頭がよくて優しい奴でしてねえ・・・誰に似たんだらうって、いつも妻と話してるんで

すよ！」

・・・聞いてねえよ！

延々続く真鍋の息子自慢に、子どもの芥川は飽き飽きしたのか、そっぽを向いていた。

真面目な群青は、引きつりながらも笑顔で相づちを打っているのに・・・。

「そんな敦が、最近ストーカーされてるんですよ！ストーカー！」
芥川の視線が、群青に訴えかける。

もう、帰っていい？

「警察の私としましても、放っておくわけにはいかないんですが・・・敦が言うには夢にまで出てくるらしくて、悩んでいるですよ！可哀相に・・・」

真鍋は汗を拭った。

しかし肝心の芥川は、またも視線で群青に訴えかける。

断っていいかな？この依頼・・・

群青は咳払いした。

「あの、ストーカーに心当たりあるんですか？」

「ありますとも、ありますとも！」

だから、何故二度言うっ？！

「前の彼女です。モトカノ、モトカノッ！」

真鍋は眉をひそめた。

「敦はちゃんと別れたって言ってるんですけど、どうも相手は納得していないようで・・・女ってやつあ、恐いですからねえ」

その顔と容姿で、女を語ってほしくない。

「では、息子さんを夢から解放するのが・・・今回の依頼でよろしいんですか？」

「お願いします」真鍋は深く頭を下げた。

群青が、分かりましたと承諾し芥川を横目で見ると、爆睡していた。

「主！本当にやる気あるんですか？！」

珍しく、群青は顔を赤くして怒っている。

「だってえ！親バカお巡りの話し、つまないんだもん！」

こいつは・・・精神年齢五歳だな！

「お言葉ですが主、最近じゃ烏の連中も動き出していると噂されています。生半可な覚悟で夢に入るなら、私は維持でも止めますよ！」

明後日の方向く、芥川。

「主！！！」

「分かってるよ！ちゃんとやるから、そんな怒るなよお！！！」

不安が拭えないのか、群青の目つきは変わらない。

「よおし！まずは自慢の息子とやらに、会いに行きましょうか！」

芥川的笑顔を見ても、群青は笑えなかった。

生半可な覚悟で夢に入るつもりはない。ただ、敦とやらが羨ましかったんだ。あんなに息子自慢してくれる親父がいる敦が・・・。

敦の話し

高校三年生の敦は、受験真つ只中。それでも、本当に悩んでいるのか、話を聞きたいと言うとすぐに駆けつけてくれた。

「すみません、遅れて」

慌てながら走ってきたのは、黒縁眼鏡がよく似合っている男。見るからに真面目そうなタイプだ。

「こちらこそ、忙しいところすみません」

群青と芥川が軽く会釈し、名刺を差し出した。

「その制服、南条高校でしょ？私の母校ですよ」

そう言う群青を見つめた敦は、名刺をもう一度確認し、少しだけ頬をひくひくさせた。

「ま、松風群青さんって・・・あの松風群青さんですか?!」

芥川の頭上に、クエッションマークが現れる。

・・・どの松風群青？

「南条高校始まって以来の天才、受けた名門大学は全て合格したって、超有名ですよ!」

興奮する敦。

「そりゃ、どうも・・・」

「まだありますよ!うちの弱小バスケット部を全国大会出場まで導いたとか、ラブレターは毎日十通もらってたんですよ?!」

圧倒される群青。

しらける芥川。

「会えて光栄です!あの僕、れんめい蓮明大学目指してるんです!合格の秘訣とかってありますか?!」

「えっと・・・勉強することかな?」

秘訣じゃねえ!

「なあなあ、そんなことより夢はどうなの?ストーカーは?!」

不機嫌な芥川が無理矢理間に入り、やっと本題に入ることができ

た。

名前は紅まどか^{くれない}。付き合ってたのは高校二年までです。僕、初めて告白されたんです……。

彼女は凄く美人で、明るい子なんです。一緒にいるだけで楽しくなる、そんな存在だったんですが……段々、彼女の本性が見えてきたんです。

彼女は、僕が他の女子と話すことを異常に嫌いました。まぢギレして、物とか投げてきたりもしたんです。それが恐くて、別れ言っただんです。

「何でそんなこと言うの？」彼女は泣きながら、しがみついてきました。

「お願い、一人にしないでよ！」

それから、新しい彼女ができたんですが、まどかからのメールや電話はとめどなくて……。アドレス変えてもくるんで、お手上げです。終には夢にまで出てくるようになりました。

「ストーカーねえ……彼女いない歴、年齢の僕からしたら羨ましいよ。逆に」

敦と別れた後も、二人は喫茶店にいた。

「そうですか？」

「そりゃ、モテモテの群青くんには分からないでしょうけどっ」

嫌味を苦笑いでかわす群青。何も言わないところが、彼の頭のいいところだ。

「けど、紅さんという方も相当好きなんですネ、敦くんのこと」

「好きすぎたらストーカーになっちまう、今の世の中ってのはそういう世の中なんだよ」

群青も頷いた。

「……群青も、ストーカーとかされたことあんのか？」

突然の質問に、群青は飲んでいた紅茶を嘔き出しそうになった。

「は？」

「毎日十通ももらってちゃ、ストーカーの一人や二人・・・なあ？」
一人や二人って・・・

「いませんよ。私は、主の側にいると誓ったんです。彼女だっていたことはありません」

「じゃ、告白されてたらどうやって断ってたんだよ？」

半信半疑の芥川は、眉間にしわを寄せる。

「簡単ですよ。コレだって言えば、みんな諦めます」

群青が取ったポーズに、鳥肌が立った。

「あ・・・えつと・・・」言葉に困る芥川。

「もちろん、嘘ですよ。嘘に決まってるじゃないですか・・・」

けれども、何だかその笑顔に寒気がした・・・。

紅まどか

翌日の午後、喫茶店に現れたのはダボダボのセーターを着た女子高生、それが、紅まどかだった。彼女の美貌と容姿に、芥川はすっかり釘付け。すつきりとした目鼻立ちに、透き通るような白い肌。潤った唇が、男心をくすぐる。

・芥川だけかもしれないが。
「初めまして」

彼女の態度は、堂々としたものだった。それに、何故自分が呼び出されたのかも、悟っている様子だ。

「お忙しいところ、呼びたてしてすみません」

群青の丁寧な態度を見て、彼女は鼻で笑った。

「大丈夫。いつも暇だから」

手鏡で、身だしなみをチェックするまどか。完璧な姿に、一体どこをチェックする必要があるのだろうか。完璧な姿に、一体どこを

「ねえ、夢解って本当に人の夢に入れるの？」

まどかが身を乗り出す。

「まあ・・・一応」二人とも、答え方が曖昧だ。

「まぢで?! 凄いいんだけど!! 超面白そう!!」

そんなに笑顔になれるほど、この仕事は楽しくはない。

「で、まどかに何か聞きたいことでも？」

彼女は頼んだジンジャエールを一口飲むと、本題に入った。

この目に、群青はつけ入るスキがないと感じた。

「スリーサイズいくつ？」

群青の殺気が、くだらない質問をした芥川に向く。

「・・・じゃなくてえ、あのさ、真鍋敦の奴が、あんたからストーリーカースされてるって言ってたんだけど」

随分、単刀直入に聞く人だと、まどかとそして群青も思った。

「ストーリーカー?! あたしが? まさかっ!」

目を丸くするまどか。

「そりゃ、別れて間もない頃は、メールとか電話はしてたけど・・今は全くしてないわ」

キツパリとした口調と、意外な返答は、芥川と群青を動揺させた。

「本当、してないの？」

「しつこいわねえ！してないわよ！」

この目に、嘘はないと思う。

「敦くんことは、キツパリ忘れたってことですか？」群青の問いに、彼女は目を逸らした。

「・・忘れてない。って言うか、今も好き」

沈黙する。

「モテないわけじゃないけど、自分から人を好きになったのは彼が初めてだったから・・」

まどかは少し笑った。

「凄く優しい人で、まどかのこといつも考えてくれる人なの・・けど、気づいちゃったの、その優しさを彼は、みんなに振りまいてるんだって。他の女にもね」

まどかの目が、虚ろになる。

「独り占めしたかったの。だって彼は、まどかのものだったから・・勇氣出して告白した、まどかのもの。ま、その思いが強くなればなるほど、彼は遠ざかっていったけど・・」

芥川の目に映るまどかは、純粹に人を好きになった女の子だった。この子の想いを、ストーリーカーの一言で片付けようとした自分が、許せなかった。

「自業自得みたい、別れを言われたのは・・こういう女は、重いつて忌み嫌われるのよ」

彼女が立ち上がる。

「とにかく、まどかは一切ストーリーカー行為はしてませんのでっ！じやね」

颯爽と歩き去るまどかを、二人は止めることができなかった。

人は何故、誰かの優しさを独り占めしたくなるのだろう。自分だけに与えてほしくて、力づくでも手に入れたいくなる。
キミの優しさは、自分だけのものだ・・・

ナイフ

その夜は、雲が空を覆いつくしていて、星一つ見えない。生暖かい空気がどんよりと漂っていて、どことなく不気味な感じがした。

「ねえ、まどかと敦、群青はどっちを信じる？」

「どちらも疑いませんよ。一応はね」

一応？芥川が首を傾げる。

「まどかさんが、ストーカー行為をしてないってことは信じます。けど、敦くんへの想いがまだあるってことは、それに似た行為をしている可能性はあります」

「それに似た行為ねえ・・・」

群青の考えていることは、さっぱり分からない。幼い頃から、群青は一人で考え一人で行動するタイプだった。芥川はそれについて行くだけ。全てを彼に任せていたからだ。

けれども、夢職としての力が自分にあると分かった時、芥川に自信が芽生えた。

群青にないものが、自分にはあると。

「ま、とつとと敦の夢に入って、仕事を終わらせようか！」

だから今、自分の足で歩くことができるんだ。

ぐっすりと眠る敦の前で、二人は目を合わせた。

「よし、入るぞ」

「はい」

群青が笑顔を見せる。

敦の手を握った二人が、夢の中へと入っていった。

「ここですか・・・」

そこは闇に包まれた世界。

目の前には、しゃがみ込んでいる敦がいた。

「敦！」

二人が駆け寄る。

「大丈夫か、お前！」

久々の仕事で、正直、芥川自身も緊張している。

「はい・・・でも声が・・・」

声？

耳を研ぎ澄ませると、聞き覚えたのある声がする。

「敦い・・・」

あの声は、まどかだ・・・

「どういうことだ？」

芥川の心配そうな目が、群青を見る。

「分かりません・・・」冷静な群青の額に、汗が見える。

まどかの声は、どんどん大きくなる。分からない・・・どこからするのだ？これは、まどかの敦に対しての呪縛か？

「主・・・アレ・・・」

群青が指差す方向。

それを見つめる芥川と敦。

現れる人。

「こんばんわ」

それは、笑顔のまどかだった。

「群青？どういうことコレ?!」

分からない。

敦は夢にまどかが現れると言った。夢に、憧れの人や憎い人が現れる人はよくある。けれどもそれは、幻。姿形はどことなくぼやけていて、ましてや喋ることなんてありえない。

しかもまどかは、自分の意志でここにいる・・・

「そんなに驚かないですよ！まどかも、人の夢に入れる力を持っているわけえ!!」

・・・そんなわけない。

人の夢に入る力があると分かれば、夢解の本部が黙っているわけ

ない。

「凄いでしょ？まどかも夢職う〜！」

「嘘だ！おい、どうやって入った？！敦の夢に」

芥川が声を荒げる。

その声に、まどかの表情が強張った。

「うるさいわねえ・・・どうだっていいでしょ？敦のこと好きだから、神様が助けてくれたの！」

敦が声を震わせた。

「何なんだよ、お前！いい加減にしてくれよ！！」

倒れそうになる敦を、群青が支えた。

「まどかさん、どういうことですか！何故、彼の夢に？！」

「好きなの。誰にも渡したくないのっ！でも、現実じゃ敦はまどかのこと恐がって、逃げてばかり。だから夢に入ることにしたの・・・やり方を教えてくれる人がいたから」

やり方？

「誰ですか、それは！」

「秘密つて、約束したから教えない！」

まどかが近づく。

「来るな！」その前に、芥川が立ちはだかった。

「お前のこと、ストーカーって思って悪かったなって思ってた・・・けど、撤回する。お前は、夢でストーカーする最低な野郎だ！」

「何がいけないのよ！敦の夢に入って！！」

芥川の体が震える。

「何がいけない？全部いけないことなんだよ！他人の夢に入るっていうのは、そいつの人生狂わしちゃう危険がある、だから夢職だけに与えられた仕事なんだよ！」

鼻で笑うまどかが、芥川の目に映った。

「いいわねえ、敦の人生狂わせちゃうのも・・・それをまどかが救ってあげるの！まどかは、彼を守る女神様」

狂っちまっているのは、この女の方だ。

「もういい、お前とは話しても意味がないから。この夢から、敦を解放する」

芥川が構えると、まどかはポケットから何かを取り出した。

・・・ナイフ?!

「お前・・・何だよそれ・・・」

芥川と群青の目に映ったのは、暗闇にも負けず不気味に光る細いナイフだった。

そのナイフに刻まれた模様は・・・黒のダイヤモンドマーク

動けなかった夢職

久々の仕事だった。やる気はあったし、自信もあった。けれども、予想だにできなかった展開に、芥川の気持ちは揺れ動いていた。

「よく切れるよ。ホラッ」

まどかが自分の指にナイフをあてると、彼女の指から真っ赤な血が滴り落ちた。

「そのナイフ、どっから手に入れた?!」

「だからあ神様がくれたんだってえ!」

神様・・違う。あの模様に、見覚えがある。

夢の中で使用可能な武器を作れるのは、ヤツしかいない・・。

「敦、こっちに来てよ・・また、まどかの元に戻ってきて。お願いだから」

彼女の瞳が潤みだす。

「い、嫌だよ・・誰が行くかよ・・」

敦の目は、完全にまどかに怯えていた。

「敦・・」

「そうだよ。こいつはな、お前のことストーカーって言ってビビッてんだよ。もう一度好きになってもらえると、本当に思ってるのか?」

言いすぎです・・群青の目が、芥川に訴える。

「敦の目に映るお前は、もうストーカーでしかないんだよ!」

「主!」

「何だよ群青?本当のことだろ?!」

「敦は好きって言ってくれた!!!!!!」

流れ落ちる涙。震える体。

「なあ・・何で敦にこだわるんだよ。自分のこと、こんなに恐がっ

ている奴のことなんて忘れて、もつとお前自身を好きになってくれる奴を探せよ。僕は、あんたが哀れでなんないよ」

まどかは首を振った。

「友達もないまどかに、初めて声を掛けてくれたのは敦だったの。その時、運命の人だって思った。まどかにとって、そんな人は二度と現れない・・・だから取り戻したいの」

流れた血が、暗闇の世界に飲み込まれる。

そうかこの闇は、まどかがいた暗闇なんだ。自分がいた闇を、敦にも分かってもらいたかったんだ。

「まどかさん、きつといますよ。大丈夫。人は、星の数ほどいるんですから」

群青の笑顔に、まどかのナイフを握る力が緩む。

「そんなもん捨てな。僕なんかね、何年彼女がいなと思ってんの！一度もないわけ！悲しすぎるぜ？」

・・・主・・・

「だから大丈夫だって！」

主・・・悲しすぎますし、理由になってません。

「・・・まどかは・・・」

本当に捨てていいのか？あんなに手に入れたかったものが、目の前にある。なのに、それをみすみす逃しているのか・・・？

そうだ・・・敦が好きなんだ。

「駄目。やっぱり駄目！来てくれないなら死ぬわ！！」

ナイフの先が、まどかの喉に向く。

「バカ野郎！！！」

「ねえ夢職さん、夢で死んだらどうなるの？」

引きつったまどかの目が、芥川を見る。

あのナイフは、夢で使用可能なもの・・・現実にいるまどかは・・・

「お前、本当に死ぬぞ」

「どっちみち、敦が戻ってきてくれないなら・・・まどか生きてる意味ないし」

「主！何してるんですか！早く、ナイフを取り上げて！」
生きてる意味がない・・僕も、そう思ってた。誰からも必要とされなくて、むしろ生まれてきたことを後悔されていた。
意味がない人生を、歩むほどバカじゃない。だから、死ぬことも考えた。

けれども、この世界に入って初めて言われた言葉・・
『キミがいてくれて本当によかった・・』

そう言われた瞬間、救われたんだ。

生きている意味がないなんてこと、絶対にないんだ。

「来ないで！」

芥川が動こうとした時、まどかはナイフを自分に突きつけた。

「夢職さん・・もう少し、早く会いたかったなあ・・」

駄目だ・・そんなことしちゃ！」

「主！」

動け体！動け自分！！

救わなければいけない・・僕は夢職だ。

薄暗い空の隙間から、冷たい雨が降ってきた。それはまるで、まどかの涙だ。

「主・・」

振り返ると、沈んだ表情の群青が立っていた。

「まどかは？」

助けることが出来なかったまどか・・

「駄目でした・・」

重たい言葉が、芥川をひざまずかせた。

「・・クソオ・・」

動けなかった。一瞬、救えなかったらどうなるのか考えてしまった。自分にまどかが救えるのか、迷いがあったんだ。それが動きを

遅らせた。

ナイフが刺さったまどかが、今も脳裏に焼きついている。

「くそ・・・くそ！くそお！！！僕は、僕は・・・」

頭を抱え込んだ。

「主・・・」

そんな芥川を、群青の優しい手が包んだ。

「僕は、自惚れていたんだ、この力に。救えないものなんて、何も無いって思ってた・・・自惚れていたんだ」

自分に、できないわけないと・・・

「主、やり直しましょう。この経験を忘れずに、また歩きましょう。二度と、まどかさんのような方を出さないと誓いましょう」

「ああ・・・」

流れる涙・・・群青の温かさ・・・そうだ、僕は生きている。生きている限り、進まなければいけない・・・。

まどかのことを胸に刻んで。

「群青・・・今なら、淑の気持ち分かるよ・・・」

「・・・ええ」

淑、お前は、こんな重たい後悔を、もう何年も背負って生きていたんだな。

それでも前を向いて、ずっと歩いていたんだな。

僕も、歩み続けるよ・・・。

真夜中の屋上

リリーと名づけてくれた親は、多分死んだ。

育ての親は、あたしを捨てた。

何も持っていないかった。手の中には何もなかった。夢も希望も、未来も、あたしは何一つ持っていないかった。手ぶらで歩くのは軽いけど、生きている実感はなかった。

何日も歩いてきた気がする。けれども、何も変わらない日常が続いた。進まない世界ほど、息苦しいものはない。何を目指して生きればいいのか、何の為に生きればいいのか、何を目指して生きる糧に生きればいいのか、何だろう……

誰か、教えて……

「こんばんわ。カワイ子ちゃん」

そんな時、アイツと出会った。

あの頃のアイツは、白髪の髪が短くて、目がはっきりと見えていた。

「寒くないかい？服と靴を買いに行こうか？」

差し出された手を、疑うことなく握りしめた。アイツの手は、とても温かくてびっくりした。

「それから、髪を切りに行こうか？食事もしたいね」

アイツはずっと笑っていた。あたしの中にある、何かを記憶するという機能が、初めて誰かを記憶していく。何もなかったあたしの世界に、初めて登場したのはアイツだ。

「生きることは大変だねえ……やらなきゃいけないことが多すぎる」
生きるということ……

そうか、あたしは生きていたんだ。生きていたんだ。

「それよりも、自己紹介だったね」アイツは笑って言った。

「初めまして……鳥と申します」

カラス……変わった名前だ。

「あたし、リリー」

烏は微笑んだ。

「リリー。可愛い名前だね」

「ホンマ、つまらん夢やったなあ？」

高層ビルの屋上に描かれているのは、複雑な模様の大きな魔法陣。

「オレはもつと、あの嫉妬女が暴れてくれるかと思っただんやけど・・・

まさか、自分を刺すやなんて。女することは、分からんなあ」

聡明は、火のついたままのタバコを、屋上から投げ捨てた。

「それにしても、あの夢職には笑えたなあ？最期の最期まで、諦めずに説得するやなんて、オレの苦手なタイプや」

「寒い」

「は？」

聡明の目に、体を震わすリリーが映る。

「あの、今、気温二十度なんやけど・・・寒いんか？」

リリーは黙って頷く。

「ベスト、貸したるわ。着とき」

「ありがとう」

おかしな奴やな・・・聡明が呟く。

「にしてもリリー。何であの女に目つけたん？」

「死んでほしかったから」

こいつは、凄いことを平然と口にする。

「あの人は・・・色んなものを沢山持つてるのに、まだ欲しかった。それがムカついたので」

綺麗な容姿、帰る場所、友人、親・・・

何もなかったあたしとは違う。ムカついた・・・。まだ欲しがるあの女が。

だから奪ったの。命というものを。

「よお分からんけど、リリーの標的は最初から、あの女やったんやな」

返事をしないリリーの黒髪が、風になびく。その日本人形のように艶のある髪は、月の光で輝いていた。

「ま、ナイフの切れ味も確かめられたし、今回の仕事は成功やな？」

「・・・そこそこ」

ただ、あのナイフを回収しそこねたのが失敗だ。あのバカ面の夢職の隣にいた、冷静なパートナーの男が、混乱している中で、丁寧にもハンカチで包みやがった。

失敗だ。

あそこまで冷静さを保てる精神の持ち主は、そういない。

「ナイフを、返してもらわなくちゃ」

「オレが行こうか？最近、体なまっとるんや」

「いい。自分で行く」即答だった。

「了解しましたあ。ほな、頑張つて」

そう言うと、聡明は魔法陣の真ん中に立った。

「一つ忠告や」

魔法陣の周りを、光が包み込む。

「油断大敵やで？」

「・・・了解」

強風が、魔法陣から吹き出すと、そこに聡明はもういなかった。

同時に、魔法陣も消えている。

「さて・・・行きましょう」

暗闇に飲み込まれるように、リリーは姿を消した。

誰もいなくなった屋上には、不気味な空気だけが残っていた。

さんせいじで・・・

その日、淑の事務所に珍しい客が来ていた。

「久しぶりだな、群青」

「お元気そうで何よりです。淑さま、ミウミさま」

美男子の群青の登場に、ミウミの目は輝いていた。

今日の紅茶がやけに美味しいのは、群青が来てくれたお陰だ。

「群青さんが来るって分かってたら、美味しいケーキを買っておいたのに・・・」

沈むミウミ。

別に群青が来なくても、ケーキくらい買って置いてほしいものだ。「お気遣いなく。それにしてもミウミさん、また一段と綺麗になりましたね」

群青の惱殺スマイルが、ミウミの心臓辺りにヒットする。

「い、嫌だ！！何言ってるんですか、群青さん！！！」

淑の呆れ果てた表情に、ミウミは気づきそうもない。

「で？用は何だよ？」

空気が変わる。

「実は、このナイフの件で伺いました」

取り出したのは、黒いダイヤが刻まれたナイフ。

群青は、今回の出来事を話し出した。

「なるほどな、そいつあ十中八九、烏関係の仕業だな」

「烏本人の仕業の可能性は？」

淑は首を振った。

「それはない。烏が使う凶器には、黒のハートが刻まれている」

仲間がいる可能性があることは、夢解の調べでも予想されていたが、実際にいると分かるとため息が漏れる。

「ところで、お前の主はどうした？」

「主は、今回のことでもかなり落ち込んでおられると思つので、このことは内密に・・・」

淑が苦笑する。

「お前さ、早いとこ夢職になれよ。いつまでアイツのパートナーやつてるつもりだよ。オファーは来てるんだろ？」

群青の曖昧な返事に、少々腹が立つ。

「俺には、群青の考えがよく分からねえよ」

ずっと一人だった淑に、ずっと一緒の二人の気持ちは理解しがたいものだ。

「ミウミさんは、夢職になられるご予定はないんですか？」

「こいつはまだヒヨッコだから、無理だよ」

ミウミが答える前に、あっさりと淑が払いのけてしまった。

彼女の殺気が増す。

「淑さま・・・このナイフ、私が預かっていてもよろしいでしょうか？」

「ああ。芥川の野郎よりお前の方がいい。が、気をつけるよ、狙われている可能性がある」

群青は深く頷いた。

「心得ております」

「俺も、野辺の野郎のところに行って、色々聞いてくる。また情報入れるから、待っていてくれよな」

「承知いたしました」

話がまとまり、やっと一息入れようとした瞬間、事務所のドアが思い切り開いた。

「愛しのミウミちゃん!!!」

飛び込んできたのは、なぜかタキシード姿の芥川。

一同、目が点になる。

「会いたかったよ！僕のマドンナ!!!」

・・・落ち込んでるんじゃないのかよ!!!

「さあ、愛がこもった花束を、どうか受け取ってください!」
愛じゃなくて、執念がこもってるよ。確実に。

「は・・・はあ・・・」

絶句のミウミが、一応バラの花束を受け取る。

「そんなもん受け取ったら、バカが移るぞ!」

淑の冷めた声にもめげず、芥川の目は輝きを増す。

「ミウミちゃん、僕はキミの気持ちを知りたいんだ!僕と、結婚してくれませんか?」

「無理です」一刀両断。

「じゃ、せめて恋人に・・・」

「無理です」間髪入れず・・・

こんな主じゃ、群青がパートナーから解放されるのは、程遠い。

自分のパートナーが、音も立てずに消えたことに、肝心の主は気づいてないようだった。

やれやれ、主の登場には参った。神出鬼没とは、彼のような人のことを言うのだな・・・

群青は凶器のナイフを見つめる。

旦那さまは死ぬ間際、主のことを頼むと私に言ってきた。そして私は、主を一生お守りすると誓った。だから、この件に主を巻き込み、危険な目に遭わせるわけにはいかない。

主にもしものことがあつたら、私は旦那さまに顔向けできない。

邪悪に光るナイフの刃。まるで持ち主に、自分の居場所を教えているようだ。

その時だった。背後から、まがまがしい殺気が襲ってきた。

「誰ですか!」

暗闇に、群青の声が響く。

殺気は徐々に近づいてくる。

「みいつけた・・・」

そこに現れたのは、黒いワンピースを着た、小学生くらいの女の子。

「・・・このナイフを探しに？」

「ええ。返してくれない？ソレ、あたしのなの」

声の抑揚が全くない喋り方。まるで、血の通っていないアンドロイドのようだ。

「黙って返すわけにはいきません。コレは、いろんなことを知る手がかりになりますからね？」

「何が知りたいわけ？」

少女が一步近づくと、群青は一步引く。

「烏の仲間ですか？」

少女は頷いた。

「奴は今どこに？」

「ねえ、そんなこと知ってどうするの？」

少女はにんまりと笑った。

「どうせここで死ぬのに・・・」

周りの景色が一気に変わる。見たこともない、殺伐とした地に、群青は立っていた。

崩れる群青

冷たい風が、二人の髪を撫でる。

二人の殺気が入り混じり、空気は張り詰めていた。

「・・・ここは・・・どこですか?!」

群青が辺りを見回す。

「誰かの夢の中」

・・・夢?!

「勝手に入らせてもらったの。誰かの夢の中にね・・・」

「そんなことが?」

声が出ない。そんなこともできるのか?!

「入りやすそうな夢を見つけて、あたしは入ることができるの。どこにいても、何をしていてもね・・・」

今、眠っている誰かの夢の中に、自分がいるのが信じられなかった。けれども、彼女が嘘をついているようには見えない。

「あなたが、まどかさんにこのナイフを渡したんですね?」

「そうだよ」

だから何? そう、少女の目は言っている。

「なぜ、彼女に渡したんですか!?!」

「・・・死んでほしかったから渡したの。多分、死ぬだろうなって分かったし」

淡々と話す少女に、思わず身震いした。この子は、死というものに無頓着だ。

「それに、欲しいって言ったのはあの女だよ? あたしは悪くない」
悪くない?

その言葉に、群青の瞳孔が開いた。

「ふざけるな・・・あんたのせいで、まどかさんは・・・」

「あたしのせい? バカじゃん・・・」

少女が、群青の目の前に来た。反応しきれないほどの速さで・・・

「全部、あの女が望んだことだよ！」

群青が、少女の力によつて吹っ飛ばされる。

「グワツ！！」地面に思い切り身体をぶつけ、息苦しさをから血を吐いた群青。

なんて力だ。あんなに小さな体なのに・・・

「立ちなよ。本当は、もつと強いんでしょ？」

近づく少女。

「お前、名前は？」

「リリーだよ」

リリーの足が止まった。

「そうかリリー・・・私を怒らせた女性は、あなたが初めてですよ」

「・・・だから何？」

感情のない口調。本当に、アンドロイドのようだ。

群青は上着を脱ぎ、黒いシャツの袖を捲くつた。

「準備完了です。私が、この手であなたを捕らえます」

「できるもんならやってみなさいよ・・・」

二人の交戦が始まる。

群青は夢の中で使える武器を持っている。それは、パートナーの中でも優秀な者にしか与えられない武器。

「・・・捕らえましたよ」

それが、リリーの足を捕まえた黒の蔓^{つる}だ。

「さつきからやけに接近戦を好むと思ったら、こういうことだったんだ」

「ええ。気づかれまいと、攻撃されるように演技していたんですが、成功ですよ」

リリーの足は、黒の蔓に縛られたまま。動かすことができない。

「その蔓、切ることは不可能ですよ。私の力によつて強力になつていますからね」

「そうみたいね。ね、夢職の連中も、こつこつ武器って持ってるの？」

リリーは平然とした口調をやめない。

「さあ、どうでしょうかね」

怯えもしないその姿が、群青の怒りを増幅させる。

「捕まったら、あたしは拷問を受けるんだよね？」

「そうですよ」

リリーが、初めて声を上げて笑った。

「それは嫌だから、やっぱりあんたには死んでもらわないと」

彼女の形相が変わる。

その瞬間、リリーはしゃがみ、両手を地面に当てる。

「何をする?!」

「言ったでしょ? コレは、誰かの夢の中だって・・・誰だか、分かるかしら?」

「・・・どういうことだ?!」

「闇の力に、苦しむがいい・・・」

リリーの手が黒い光に包まれ、その光は一気に地面に放出される。

その衝撃で、地面が揺れ、亀裂が入った。

「ウワアアア!!!」

群青が頭を抱える。

「痛いでしょ? あたしの力で、あなたの夢を破壊しようとしてるんだから・・・」

そうか、この夢は・・・私の夢・・・

「夢の中で闇の力を解放すれば、その激痛で大抵の人は死ぬ。これって、本当はあんまり使っちゃいけないんだけど・・・残念だったね? 縛るなら、足じゃなくて手にしないと・・・」

彼女の甲高い笑い声が、群青の頭に響く。

「さ、これでお仕舞いだよ。哀れなパートナーさん・・・」

物凄い力を溜めたリリーの両手。

その両手を縛ろうと、群青はありったけの力を振り絞って黒い蔓

を操る。しかし、無常にも力が尽き、その蔓がリリーの腕にまで届くことはなかった。

「さようなら・・・」

闇の力を解放するリリー！

周りの景色が、どンドン崩れていく。それと同時に、群青の身体が地面に落ちた。

「結構やるね。楽しかったよ・・・」

蔓が解けたリリーは、群青のポケットの中にあつたナイフをゆっくりと手に取る。

「目覚めることができたなら、また戦いましょう・・・じゃね」

群青の夢の中から、リリーが消えていく。

その姿が、薄っすらとだけ群青の目に映った。

主・・・できそこないのパートナーで、すみませんでした・・・

進む夢職達

真夜中の病院は、どこも一緒だ。薄暗くて、不気味で、静まり返ったそこに行くと、地獄とはこういうところなのではないかと思う。

固く冷たいソファ―に腰掛けた芥川は、顔面蒼白していた。鳴り響いた電話、受話器の向こうから聞こえてきた声に、芥川の頭は真っ白になった。

群青が意識不明で病院に運ばれた。始めは、何かの冗談だと思った。しかし、病院で死んだように眠る群青を見て、心臓の鼓動が早くなった。不安に駆られ、誰に伝えればいいのかも分からなくて、無意識に電話をかけていたのは淑のところだった。

「芥川っ」

いつもは呼び捨てると、拳が飛んでくるはずだが、今回の芥川は脱力していた。

「何があった？」

淑も少しばかり動揺している。

「・・・ミウミちゃんは？」

質問に答えず、芥川が逆に聞く。

「・・・事務所だよ。それより、何があった？！」

無意識に声を荒げる。しかし、淑の目に映る芥川に、状況を説明してもらったことは無理そうだった。彼自身も、何があったのかまだ理解できてないのだろう・・・。

「分からない・・・路上で倒れてるところを助けられたみたいで・・・医者も原因不明だった」

「原因不明って・・・何なんだよ」

壁に拳をぶつける淑。

無反応の芥川。

「氷壁、お前、群青から何か聞かなかったか?!」

芥川が初めて淑を見た。

「群青の腕に刻まれた文字があつた・封つて字だ」

芥川の身体が震えだす。

「・・・鳥だ・・・」

呟いた淑から、目を離すことができなかった。

「正確に言つと、烏関連の奴の仕業だ。群青は、お前とやった仕事で拾つたナイフを所持していた。その持ち主は烏に関係している」

あの時のナイフか・・・

芥川が立ち上がった。

「何で黙つてたんだ、群青は・・・お前も!!!」

声が響く、冷たい廊下。

「群青が黙つてろつて言つたからだ。お前を巻き込みたくなかつたんだろ?そんなくらい分かれ。お前、何年群青と一緒にいんだよ」

「ふざけんな!!夢職は俺だぞ!!」

「群青にはお前以上の頭脳と、力がある!分かつてんだろつ!!」

淑の言葉は、芥川の心臓をえぐつた。

分かつていたことをこんなにはつきり言われると、次に言う言葉は何もない。

「芥川、名誉挽回したいなら俺と一緒に来い」

「あ?」

淑を睨みつける。

「野辺に聞いた。夢解は、烏の居所をつきとめつつある・・・候補は三つ。来る気があるか?」

面倒くさいことは嫌いだ。それに巻き込まれることも大嫌いだ。

夢職になつたが、そんなに凄い依頼を受けたいとも思つたことはない。ただ細々と、簡単な依頼だけをこなしていきたかつた。でも群青は、わざわざ飛び込んだんだ。絶対にヤバイと思つただらう、それでも一人で進んだ。

主の自分がこんなんで、どうする?

「行くに決まってるんだろ！」

死が待っているとしても進まなければ、群青に合わせる顔がない。

「よし・・俺もケリつけに行くぞ」

「氷壁、お前・・」

淑の目つきに、鳥肌が立った。

今まで逃げてきたんだ。けれども今回のことで、淑の中にあつた闘志が目覚めます。

進んだ先にあるものが、たとえ死だとしても、譲れない心がある。前を向いた二人の夢職を、止める者は誰もいない・・・。

アイツ

こんなところで寝たら、風邪ひきますよ。氷壁さん

思えばアイツは、いつも俺の心配をしていた。俺がどれだけ夢職の仕事に成功させても、アイツはどこか不安定な俺のことを、分かっていたのかもしれない。白にも、黒にもなりえるグレーの心を持つ俺は、アイツにとっては目を離せない存在だったのかもしれない。ずっと一人だった俺に、アイツはずっと側にいると言った。

それが嬉しかった。初めて誰かに寄り添ってみたかった・・・。

優しいアイツ。

頼れるアイツ。

俺が殺してしまった、アイツ・・・

「これが最後のところかあ・・・ここにもいなかったら、どうすんだよ？氷壁」

「一から探すに決まってるだろ」

すでに二つの場所に行ったが、どちらもハズレ。二人の頭には、三つともハズレという最悪の結果がずっと過ぎっていた。

「・・・氷壁よ、大丈夫か？」

芥川の唐突な質問に、淑は鼻で笑った。

「大丈夫って、何が？」

「いや・・・だからさ・・・烏と会えたらお前さ、プツンしちゃうんじゃないか？」

淑が首を振る。

「それはない。一回烏に会ったが、俺は冷静だった」

「かある薫のことを言われても、冷静でいられるのか？」

返事が返ってこない。沈黙は、随分長い間続いた。まずいことを聞いてしまったか・芥川は、いつだって後悔することを言ってしまう。

「問題ない」

小さいが、はっきりとそう聞こえた。

「ならいいけどさ・・・」

不安な空気が淀む中、二人は最後の場所にたどり着く。

開発に失敗した街は、ちょっとしたゴーストタウンになっている。その中でも不気味にそびえ立つ、古びた建物があった。

色あせ、わけの分からない植物が、建物の壁にへばり付くように咲いている。足を踏み入れるのもご免だ。

「まちでここ？」

芥川の顔に「入りたくありません」とはっきり書かれている。

「行くぞ」

「・・・はいはい」

年下の淑を先頭に、腰が引けてる芥川が後に行く。

こいつ、よくビビらず入れるよなあ・・・

「クソツこどもハズレか？」

ドアもない部屋を一つずつ確認するが、空だ。淑の機嫌が悪くなる。

「ハズレならそれでいいからさあ・・・早いトコ出ようぜ」

あの時覚悟した、芥川の心は一体どこに行ってしまったのだろう。

「もう少し見るから、待ってる」

淑の顔に「足手まといだ」とはっきり書かれている。

「おい、待てよ」

慌てて芥川が部屋に入ろうとした瞬間。ありもしないはずの扉が、淑が入った部屋を塞いだ。

「え・・・??」

芥川の目は点になり、淑の目は瞳孔が開いた。

「ど、どうなってんだ?!」

芥川が叫ぶ。しかし、淑の声は聞こえない。

「おい、氷壁！！！」

扉を叩くが、無意味だ。完全に塞がれてしまっている。芥川が辺りを見回す。すると、暗い廊下の向こうから、足音が近づいてくる。

誰か来る……。彼に緊張が走った。

「どうなってるんだ？」

あくまで冷静な淑は、突如現れた扉をじつくりと見た。幻覚ではなさそうだ。じゃ、何かの罠か？

「いらつしやい。地獄へ」

暗くなった部屋の隅から、一人の男が現れた。青い目が、この暗闇でも不気味に光っている。

「誰だ？」

「オレ、聡明言うんや。あんた、淑やる？」

淑は黙って頷く。

「烏がえらい気に入っとった奴やから、一度会って見たかったんや」

「へえ……。で？見た感想は？」

聡明は苦笑いした。

「せやなあ……。もつと強い奴かと思つたわ。拍子抜け」

「まだ戦つてもいないのに、分かるのか？」

「勘やけど」

今度は淑が苦笑いした。

「勘か……。俺も拍子抜けだよ。烏の仲間名乗るんだから、もつと強い奴だと思つた」

二人の間に流れる殺気は、虫一匹寄せ付けないほど鋭い。

「じゃ、確かめてみるか？」 聡明が構える。

「そうするよ」 淑も同じく、戦闘態勢になった。

アイツの目は、どんなときも穏やかだった。パートナーとして一緒に夢に入って、そこで大変な目に遭っても、その目はずっと穏やかだった。

何でも笑い飛ばしてしまふ。アイツは本当に強い奴だったんだ。

俺にはなくてはならない存在。こんな奴に会えたのは、鳥以来だった。だから、鳥はアイツを狙った。鳥にとってアイツは、きっと最も恐れる奴だったんだろう。

大丈夫ですよ。氷壁さん

俺が駆けつけたときは、アイツの体からは大量の血が流れていた。それでも大丈夫と言った。しかも、笑顔で。

動揺する俺の手を握り、喋るなど言っても喋り続けた。

氷壁さんは、強い人です。その心は、絶対に染まらない。自信を持って

それが、俺が見たアイツの最期の笑顔。

失ったものは大きすぎて、後悔となり、俺に課せられた十字架となった。

アイツのことを思い出すと、自分の中にある怒りが甦る。

アイツを殺した鳥に対する怒りが・・・

アイツを守れなかった自分に対する怒りが・・・

奈緒へ・・・

「初めまして！杉奈緒です」

アイツは、物凄い明るい奴だった。初めて会ったときから、太陽のように眩しい笑顔を絶やしたことはない。

俺には奈緒は、眩しすぎる奴だった。

「氷壁・・・淑さん・・・なんか、凄い名前ですね！」
「は？」

十三歳の若さで夢職になった日、野辺の野郎は俺に四つも年上のパートナーを紹介した。それが、奈緒。しつかり者で、要領がよくて、俺の尖った心の中にも平気で入ってくる。

今思えば、奈緒は強い奴だったんだ。力とかじゃなくて、揺るがない信念を持っていた。

「だって、こんな漢字だったら、テストのときとか苦労するでしょう？あたしだったら、自分の名前漢字で書くのでいっぱいになりそう」
「バカバカしい・・・」

俺は、奈緒のテンションに合わせることはなかった。いつも冷たい目で、彼女をあしらっていた。

それでも奈緒は、いつもハイテンション。一人で喋りまくって、一人で笑いまくって、何でも真つすぐに向かってくる。俺には真似できない。奈緒は、俺にないものを沢山持っていた。

正確には、俺と、鳥にはないものだ・・・

「死んでもいいなんて、簡単に言うな！！！！」

奈緒が俺を殴ったのは、俺が仕事で無茶したときだ。

力を使いすぎて、意識が飛んだ。そんな俺を、奈緒は救った。けど俺は、大きなお世話だと言った。誰かに助けを求めるなんてご免だった。

「死んだって構わない・・・」

そう呟いた俺に、奈緒は怒鳴った。

「あんたに救いを求めている人間が、どれだけいると思ってんの？

！あんたは、必要とされている人間なの！！！」

必要とされている・・・

こんな俺が？

「それにあたしだって、淑さんが死んだら嫌です！！！」

奈緒は、俺を強く抱きしめた。そのぬくもりは、今まで感じたことがないくらい温かくて、俺の尖った心を、いとも簡単に砕いた。

初めてだった。こんなに真剣な目を向けられたのは・・・

真剣だった。そう、奈緒はいつも俺と真剣に向き合っていた。だから俺は最初、その目を直視することができなかつたんだ。何かを見透かされているようで、陰の部分まで俺を見ているようだった。

恐かつたけど、奈緒になら俺自身をさらけ出せると思った。

けれども、別れは早かつた。いや、俺のせいだったんだ。

全ては、俺のせい・・・

奈緒は勝手に動いたんだ。上司である俺に無断で。俺がそれに気がついて、駆けつけたときは、もう手遅れだった。

奈緒の前には、手を血で染めた鳥が立っていた。

目の前が真っ暗になり、何があつたのか理解できなかった。ここに倒れているのは、俺のパートナーなのに、一瞬、恐怖で怯んでいた。

「大丈夫ですよ・・・」

怯える俺に、奈緒は笑顔だった。信じられなかった、こんな目に遭つたのに、笑っていたんだ。

強い奴・・・

「そいつが悪いんだ・・・」

鳥がそう呟いた。

俺の目に映った鳥は、何かに怯えていた。真つすぐな心を持つ女に、邪悪な力を持つ死神が、怯えていたんだ。

「・・・この野郎!!!!」

鳥に初めて立ち向かった。そんなことしたって無駄だって分かっているのに、初めて俺は牙をむいていた。

呆気なく倒された俺の目から、涙が止まることなかった。息を引き取った奈緒に寄り添い、何度も謝罪を口にした。

失ってから気づく。奈緒は、俺が初めて手に入れたと思った人だったんだ。

俺を守って、自分を犠牲にした奈緒へ・・・

俺は、きつとあの頃から何も変わっていないんだ。新しいパートナーができて、俺自身は何も変わっちゃいない。

過去と立ち向かわない限り、変わることはないんだ。だから、お前の強さを見習おうと思う。お前が命をかけて守ってくれたから、俺も今度は命をかけて過去と戦おうと思う。

だから、見ていてくれ。

駒か、仲間か

「案外、やるね。あんた」

聡明の額に、汗が見える。誰かと対峙して、彼が汗を流すなんてことは初めてだろう。

「お前、何で烏の仲間になった？」

「気になる？もしかして、少なからずジェラシーとか感じとる？」
この、べたつくような笑い方がムカつく。

「俺が？何で？」

あつさり交わされたことで、聡明の笑みは消えた。

「あんたってスッゲー冷めたい野郎やな・・絶対、友達になれんわ」
一息つくかのごとく、聡明は煙草に火を点けた。煙草から目を離すと、淑の冷たい視線と目が合った

「俺な、殺されかけてたんや。そんなとき、烏が俺の前に現れた・・
そんで、俺を殺そうととった奴を、逆に殺してくれたんや」

灰が、ゆっくりと地面に落下する。

「殺されかけてたって、お前、誰かに狙われてたのか？」

淑の質問を、聡明は笑い飛ばした。

「狙われていたかねえ・・せやな、もしかしたら、生まれたときから狙われとったのかもしれんなあ」

聡明の話が見えない淑は、眉間にシワを寄せた。

「母親や・・俺を殺そうととったのは・・」

闇が、その一言で冷たさを増した。聡明の青い瞳に、その言葉に少しばかり動揺する淑が映っていた。

「優しい女やったんやで？俺も大好きやった・・けどな、母親は機会を伺とったのかもしれん」

烏は上手い。憎しみに蝕まれる心を持つ者を、見つけ出すのが。

聡明は煙草を地面に踏みつけ、薄らと笑みを浮かべた。

「烏な、俺にこう言ったんや・・」

君は、俺にとって必要な人なんです。死なれては困ります・・・一緒に来ますか？

躊躇することはなかった。どっちみち、こんな世界に用はなかったし、幸せな人間を壊してやりたいとさえ思った。

自分だけがこんな目に遭うなんて、おかしいんだ・・・

そんな考えが心を黒に染め、聡明は生まれ変わった。他人の幸せを、この手で壊してやると胸に秘め。

「俺にはな、烏は必要なんや。だから、あいつが俺を必要としていたときは、どんなことしても行つてやるぜ？それが、仲間ってもんやろ？」

「烏の誘惑に勝てなかっただけだろ？」

「誘惑？」

聡明の目つきが鋭くなる。

「烏はお前のこと、仲間なんて思ってないぜ。ただ、使えそうな駒を見つけたから遊んでるだけだ。俺もそうだったから分かる。俺も、烏に遊ばれていた駒にすぎなかったんだ」

「あんたと一緒にするなよ・・・裏切り者」

聡明の青い瞳が、憎しみの光を帯びて、殺気は前以上に鋭さを増していた。

「俺は駒やない・・・仲間や」

「いや、駒だね」

聡明が地面を蹴った。

淑の首を掴み、軽々と彼を持ち上げる。右手の爪は長く尖り、喉ぼとけに向いた。

「今、謝罪するなら、もっと楽な死に方にしてやるけど？」

「・・・ご免・・・だね」

「そうか、じゃ、痛みに苦しみ、死んじまいな」

右手を引き、思いきり力を込めた爪が飛んでくる。

痛そうだな・・・こんな境遇に立たされているのに、淑は冷静な目で飛んでくる爪を見ていた。

ああ、こいつの目って、俺の昔の目じゃん・・・。
鳥しか周りにいなくて、全て鳥中心に物事が動いていた。あの頃
の、俺だ・・・。

「な・・・に・・・？」突然、聡明の右手が止まった。

喉ぼとけスレスレ・・・。

「元から・・・お、まえ・・・は、ゲーム・・・オーバーなんだよ！」淑
の蹴りが、聡明の下あごに直撃した。

「グハツ!!!」

聡明から解放される淑。少し咳払いして、痛みによるける彼を見
つめた。

「俺は先手をうってある。このゲームの勝負はついてる」

「何や?!?!」

怒りにキレル聡明が、初めて自分の体を見つめた。

糸だ・・・いや、冷たい・・・これは・・・

「針金みたいなもん」

淑を見つめる。

「俺の右腕に、いつつも巻きついてんの。現実世界で対決するとき
用にね・・・少し力を加えれば、俺の言うとおりに動くようになって
る」

「俺にはそないなもん、見えんかった!」

「そりゃそうだよ・・・だってお前、俺しか見てないじゃん」

戦闘シーンを一から思い出す聡明。確かにそうだ。鳥のお気に入
りのこいつを殺したために、俺は自分の体なんて気にせず、こい
つに向かってばかりいた。

こいつが怯んだもの、俺に何度もスキを見せたのも、全てはこい
つの計画。この針金を、俺に気づかれないようにするため・・・。

「針金は、一度相手の体に刺されれば、後は俺の力の入れ具合で相手
を縛る。あんたに見つかんないようにするために、今まで微量な力
を注いでいただけけど・・・こうなったらこっちのもの」

冷たい針金が、聡明の体に食い込む。

「うわあああ!!」

痛みに、思わず声を上げる。

「痛いでしょ？俺も、想像しただけで痛いつて思うもん」

この勝負、冷静な淑の勝ちだ・・・。

「いいさ・・・俺は・・・どないになっても・・・鳥のために死ぬるんやっただ・・・らな・・・」

哀れな奴・・・。

針金が、聡明の肉を切り、骨まで砕いた瞬間、彼は壊れた玩具のようになり地面に倒れた。

だが実際は、彼の体には、何も巻きついていない。

そう、全ては淑が聡明に見せた幻覚。夢だ。聡明が煙草に火を点け、目が合ったとき、淑は彼に夢を見せた。淑の力は、一瞬で相手を夢の世界にいざなうことができるのだ。しかし、たとえ夢でも、リアルな幻覚に痛みも感じれば、人を死に追いやることもできる・・・。

恐ろしい力なんだ。

鳥による犠牲者を、じっと見つめる。

「生まれ変わったら・・・今度はお前のことを本当に大切に思う奴と仲間になれよ・・・」

冷たくなっていく聡明に手を合わせ、淑が立ち上がった。

さて、今度は芥川を助けに行かないと・・・。

誰かの為に・・・

現れた少女はリリー。しかし、彼女のことを知らない芥川の目は点になった。

「ええっと・・・こんにちわ」

「こんにちわ」

リリーは少しだけスカートを持ち上げ、膝を曲げた。

礼儀正しい子どもは好きだ。芥川は笑顔になった。

「もしかして、ここで遊んでいた子かな？迷子になっちゃった？」

「・・・そうでもない」

リリーは首を傾げる。

「もう暗いからさあ、お家に帰った方がいいと思うよ。お母さん心配するでしょ？」

「お母さんって何？」

その問いに、言葉が詰まった。なんて言えばいいのだろう・・・

「お母さんって・・・だからあ・・・自分を生んでくれた人」

しどろもどろの芥川。

「それなら死んだ」

淡々としたリリーに、年上の芥川が引いてしまう。

「・・・ああ、そう」

何て言ったらいいのかわからない芥川は、この居づらい空気を変えようと必死だったが、こんな廃墟には明るい話題になりそうなものはないだろう。

その時だった、リリーは両手を広げた。

「闇の世界へ、ようこそ・・・」

目の前に広がる世界が、真っ白になった。上下左右、色がなかった、思わず立ち眩みがした。

「何だこりゃ・・・」

「あたしの世界」

リリーはニツコリと笑う。

状況を把握できていない芥川にも、この子が相当ヤバい子だといふことは分かる。この子から漂う殺気は、普通の子どもではない。

「あんたを痛めつける・・・ナイフが必要だね」

笑ったリリーの手の中に、真つ黒なナイフが姿を出す。

「完全なSだね、君」芥川も思わず苦笑いした。

「楽しませてよ？あたし、つまらない戦い方する人間が一番嫌いなんだから」

ナイフが、不気味に光った。

「おお恐い。じゃ、僕もやられないように気をつけないと・・・」

芥川の手の中から現れたのは、アイスピックだ。

「何それ？」眉間にシワを寄せるリリー

「氷とかを砕く、アイスピックだよ！知らないの？」

首を縦に振った。

「じゃ、これが刺さったらどれだけ痛いか、教えてあげるよ」

「・・・あんたもSじゃん」

二人が同時に、地面を蹴った。

ナイフで傷つけられた皮膚から、止めどなく流れる血。あまりの多さに、痛みはない。芥川は一番傷が深い右腕に、破いたシャツで止血した。

「アイスピックって、痛いんだね」

リリーの体も、血だらけだ。

二人の地面は真つ赤。

「お互い、こんなところで戦ってないで、早いとこ病院に直行した方がいいと思わない？」

苦笑する芥川。

「病院って、何？」淡々としたその口調で、リリーが返す。

「・・・君の知識って、レベル低すぎでしょ」

リリーの目は、知識って何？と言っていた。

「あんだ死ぬよ」

「君も死ぬでしょ？」

二人の攻防は続く。

リリーのナイフが芥川の頬を切れば、芥川のアイスピックがリリーの右腕を突き刺した。リリーは、自分に怯むことなく向かってくる芥川の動きを見て、数日前の戦いに似たものを感じていた。

「あんだの片割れって、あんだに似てるんだね？それとも、あんだが片割れに似たのかな？」

「片割れ？」動きを止める芥川。

「うん。前に、あんだの片割れと戦ったの。結構面白い奴だったよ。」

「……群青。」

芥川の中にあつた様々な破片が、リリーの言葉によって一つになる。

こいつが、群青を傷つけた。

「テメエか・・テメエが群青を！！！！」

「あれ？スイッチ入っちゃった？」

殺気が増した芥川からは、これまでの力とは全く違うものを感じる。それが何なのか、リリーには分からない。

「まだ、殺す。群青の仇は、俺が討つ」

「流行んないよ、そういうの」

リリーのナイフは、その形状を変え、長い釜になった。

「もう飽きてきたから、あんだとの戦いはおしまいにする。とつとと死にな」

走り出したリリー。動かない芥川。

これで、本当におしまい……

「なっ！！！！」

リリーが振り上げた大きな鋭い釜は、芥川の頭上で全く動かなく

なった。釜を止めたのは、群青が振り上げた、たった一本の細いアイスピック。

「バカな！こんなもので・・・」

リリーの目が血走る。

「お前の言った通り・・・スイッチ入ったんだよ」

ゆっくりと顔を起こす芥川に、リリーは生まれて初めての恐怖を感じた。

彼の周りに流れる空気に、そのオーラに、彼の存在に・・・

「貴様・・・」

うるたえたリリーは、思わず後ろに引き下がった。

この男を強くしたものの・・・それは何？

「あんたがあたしを倒すことは絶対じゃない！だってあんたがいるのは、あんたの夢の中だもの！あたしはね、他人の夢に入れるのよ！・・・この夢壊せば、あんだだけってあの片割れのように再起不能になるわ！！」

釜の歯を、リリーは地面に振り落とそうとした・・・が、しかし・・・

「予想外の展開に、体がスキだらけだぜ？お譲ちゃん」

突風のごとくリリーの前に移動しが芥川が、アイスピックで彼女の心臓を突き抜いた。

「バカな・・・」

負けるわけがない。自分は、自分が負けるなんて絶対にありえない。

この力は無敵で、完璧で・・・

「嫌だ・・・」

リリーが真つ白な地面に倒れた。

彼女の血は、その地面を赤に染めていく。冷たい血、心が通っていない血だ。

「誰かの為なら、人って強くなんだぜ？」

芥川はアイスピックを消し、リリーの釜を蹴飛ばした。

「・・・流行んないわよ・・・そうなの・・・」

リリーはゆっくりと目を閉じ、静かにその鼓動を止めた。

二人がいた真っ白な世界には、鏡が割れたように亀裂が入り、そこは廃墟へと元に戻る。

小さな少女は、その姿を徐々に消していった。

終結

「芥川！！」

「おお！氷壁！！」

二人が再会したのは、階段の踊り場。お互いボロボロの姿に、思わず笑みが零れた。

「お前、ボロボロじゃん」

淑が苦笑する。

「お前が言っな」

芥川も笑った。

無事で何より。二人の目はそう言っていた。

「じゃ、本命倒しに行くか？」芥川が上の階を見つめた。

「ああ・・・早いとこ倒して、ゆっくり眠りたいよ」

二人が階段を進んだ。

廊下に出ると、そこは真っ暗闇。けれど二人を呼ぶ、殺気が漂っている。

「この部屋だな・・・」

芥川がドアノブに手をかける。

「狩る気満々つてオーラが、流れ出してるぜ」

二人は呼吸を合わせて、扉を開いた。

そこにいた、ソファーに腰掛ける二人組み・・・

「烏・・・」

眩いた淑の声は、震えていた。

「やあ、ご苦労様。ここまで大変だったでしょ？」

あくまで笑う烏に、二人の目つきが変わった。

「こいつ・・・よくもじゃあしやあと・・・」

前に出ようとする芥川を、淑が止めた。

「むやみに動くな。どこに罠があるかわかんねえんだからな！」

「罠?! バカにしないでよ。俺がそんなセコイことすると思っ?」
鋭い目つきが、淑を捕らえる。

「さてと・・・弔い合戦もここで終わりかな?」

立ち上がる烏に、二人は間合いを取る。不気味な空気に、冷や汗が流れた。

「二人ともさあ〜何で夢職なんてやってんの? 国に魂売って、楽しい? それより自由に行動した方がずっと楽しくない?」

戦闘態勢になる芥川を見て、烏は笑った。

「無駄無駄・・・はつきり言って、君なんて眼中にないから。俺の目的は、淑だけ・・・」

「つんだと!!」

怒りに身を任せた芥川が飛び出す。

「バカ!!!」淑の声は、届かない。

「無駄って言うてんじゃん・・・」

芥川の拳を軽くよけ、逆にその腕を掴み取る。
物凄い音がした。

「ぐわあああ!!!!!!」

折れた。

「ねえ淑。こんな奴と行動するくらいならさあ〜俺のところに戻っておいでよ? また二人で、楽しくやろうよ」

「俺はお前を殺しに来たんだ」

烏はため息をつく。

「俺がこれほどまでに誘っているのに、君は冷たい態度のまま・・・
やっぱり、国に洗脳されちゃった人間は、つまらないね・・・」

後ろにいた男が、烏の隣に立った。

「楼・・・君の力を借りるよ」

「・・・ああ」

そう言つと、烏は両手を合わせる。その瞬間、物凄いエネルギーが楼から放出された。

「淑、君は俺には勝てない・・・」

楼の姿は消え、代わりに鳥の顔や腕を放出されたエネルギーが包み込む。

「そうか・・・そいつは、お前が作り出した人間か・・・」

「その通り。ま、君たちが倒した二人は違うけど・・・楼だけは、俺が俺の為に、俺の力で作り出した人間。いつでも俺の力に戻る」

この空気・・・立っているだけでも逃げたくなる。

「俺だけのものになってくれる人間が、欲しかったんだよ・・・淑の代わりにね・・・」

「悲しい人間だな、鳥・・・」

「俺を哀れむつてか？・・・ふざけるな！！！」

鳥の拳が、淑の右頬にヒットした。そのスピードに、体がついていかない。

吹っ飛ばされた淑は、壁に激突する。

「つつ・・・」

頬だけ殴られたのに、全身に激痛が走る。なんて、力だ・・・

「俺は、俺の力は、完璧だ！誰も俺に楯突くことなんてできない！

いずれは国でさえ、俺に跪く！淑、お前もな！！」

鳥の手を、紫色の炎が包み込む。

「淑、俺と組もう。また夢解の連中をビビらせてやるうぜ？」

差し出された手・・・

「・・・組むわけねえだろ・・・」

ふらつきながら、淑が立ち上がった。

「お前は、俺の大切な人を殺した。あの日から、俺はお前を殺すことだけを考えて生きてきた・・・鳥、お前と俺が組むことは絶対にない・・・」

鳥の瞳孔が開く。

「・・・そうか・・・じゃ、死ぬ・・・俺のものにならないものなんて、死んでしまえばいい！！！」

鳥が飛び出した。

迎え撃つ淑。

「終わりだよ!!」

烏の拳が、淑の体を破壊する。その手ごたえに、ニヤついた。

「さよなら、淑・残念だよ・・・」

しかし、ニヤついていたのは淑も一緒。

「何だ・・・」

周りの景色が一変する。暗闇は一瞬で真っ白に変わり、強い光りが烏を襲った。

「まさか、貴様・・・」

烏が目伏せる。

「お前の負けだよ。俺がここに来た瞬間から、お前は俺の夢の中にいた・・・」

「一体、いつ・・・」

「こうなったら俺の勝ちだ。俺にばっか気をとられていたお前が、俺の仕掛けた罠に気づくことはなかった・・・」

罠・・・

「ククク・・・罠ねえ・・・セコイ奴だ」

「お前を殺すためなら、手段なんか選ばねーよ」

烏の体を、淑の針金が縛る。

「・・・淑・・・俺を殺すんだな？」

「・・・お前になんか、出会わなきゃよかったよ・・・」

淑が針金を引っ張った時、烏の体は裂け、血を吹き出した。

「さよ・・・なら・・・しゅ・・・く・・・」

最期まで笑った烏。

その烏を見つめる淑の目は、冷たい色をしていた・・・。

夢職

「・・・淑さん！！芥川さん！」

病院の前で、二人の帰りを待ちわびていたミウミの目に、ボロボロだが確かに歩いている淑と芥川が映った。

「遅くなっちゃったね、ミウミちゃん・・・ただいま」

芥川が微笑む。

「お帰りなさい・・・芥川さん、群青さん意識取り戻しましたよ」
「本当！！」

水を得た魚のように、芥川の目が輝いた。

「ちよつと俺、行ってくるわ！！」

よろつきながらも進む芥川。

「おい、大丈夫かよ?!」

淑がそう言うと、芥川は冷やかな目で言った。

「お前に言われたくない！」

それもそうか・・・

「群青！」

「・・・主」

あまりのボロボロの姿に、声を失う群青。

「へへ・・・仇、とってきたからな！」

「ご無事で、何よりです・・・」

群青の目に溜まった涙に、芥川は顔を赤らめる。

「鳥は、淑が倒してくれた・・・でも、俺だって鳥の部下を倒したんだぜ?! お前をこんな目に遭わせた奴をさ・・・」

群青が、深々と頭を下げた。

「な、何だよ?!」

「・・・私は、幸せ者です。主のような方の、パートナーになれて・・・」

恥ずかしさを隠すために、芥川は大げさに咳払いした。

「ま、結局淑に助けられたんだけどさ・・・」

やっぱり、アイツは強い。自分は、まだまだだ・・・

「群青、俺、続けるからさ・・・この仕事。もっと酷い目に遭うかもしんねえけど、続けるから」

群青の優しい瞳が、決意に満ちた芥川を見つめる。

「どこまでも、お供します。頼りないパートナーですが・・・」

二人が笑った。

そんな二人を見て、廊下にいた淑とミウミも笑った。

また、依頼に追われる日々が始まる。戦いもあるだろう・・・それでも、彼らは進むことをやめない。

それが、夢職という仕事を選んだ、彼らの進むべき道だから・・・。

夢職（後書き）

こんな形で終わらせてしまったこと、深くお詫びします。書くにつれて、話がまとまらず・・・ついに終わらせてしまいました。

ここまで読んでくださった方がいらっしやいましたら、深く感謝します。本当にありがとうございます。

今度は別の話を書こうかなと思っております。

また、目を通してくださったら幸いです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3506b/>

夢解 2

2008年11月7日07時48分発行